「駒形丸事件」―グローバルヒストリー研究の文脈で―

秋田　茂（大阪大学文学研究科）

１．　1914 年・駒形丸の航跡

・3 月 27 日：香港において傭船契約（神栄汽船合資会社.6 か月間、月 1 万 1000 香港ドル）
　早期の出航を目指すも、許可得られず←現地インド人の抗議（警官・インド軍）
・4 月 4 日：香港出航← “見切り発車”―BC 州政府の許可を得ず。
・4 月 8 日：上海入港←約 200 名乗船
・4 月 16 日：上海出航、4 月 18 日　門司港着（石炭 2000 t 積み込み、さらに 85 名乗船）
・4 月 29 日：門司出航、5 月 2 日　横浜入港（最終 352 人、船長以下船員 42 名）3 日出港
・5 月 23 日：バンクーバー着、錨泊地で停船―7 月 23 日までの 2 か月間。
・8 月 15 日：横浜入港、一部乗客（4-5 名）が下船、18 日横浜出港。
・8 月 20 日：神戸入港、イギリス領事館との交渉。9 月 3 日コルカタに向け出港。
・9 月 16 日―19 日：シンガポール到着、飲料水の補給のみで上陸許されず。
・9 月 26 日：コルカタ下流のフーグリ河口に到着。
・9 月 29 日：バッジ・バッジ着岸、夕刻に騒乱発生、多数の死傷者を出す。

以上の経緯だけ見ると、駒形丸事件は、第一次世界大戦の巨大な影響の陰に隠れた、小さなミクロのエピソードと見なされるだけで終わってしまう可能性が高い。
本研究では、次の二つの視点から、駒形丸事件の世界史的意義を再考する。

(1) 「関係性」を重視するグローバルヒストリーの方法論に基づき、local（地方）⇔national（国家）⇔regional（広域の地域）⇔global（地球世界）という「4 層構造」の相互連関性の中に駒形丸事件を位置付ける。神戸・バンクーバー・コルカタという、それぞれの港市の地方史(local history)として、バラバラに扱われた駒形丸事件は、日本史・カナダ史・インド史の一国史(national history)を枠組みの中で、ばらばらに語られてきた。同事件には、インド太平洋規模での移民問題として、広域の地域史(regional history)を基軸に、地球的規模でのグローバルなイギリス帝国の再編(imperial history)や、日英両帝国の帝国間国際秩序(intra-empire history)の見直しを通じて、global history の構築を可能とする、多様な重層的連鎖を見出すことが可能である。ミクロな事件を通じて、マクロな世界史の構造・関係性を解明する。

(2)　グローバルヒストリー研究の中心的テーマの一つが、ヒトの移動＝移民史研究である。本研究では、19－20 世紀転換期の世界経済において「国際公共財」を提供したイギリス帝国の海運・通信（海底電信網）のネットワークと移民という、経済史研究と、北米のアメリカ合衆国・カナダ、東アジアの香港、東南アジアのシンガポール・海峡植民地、南アジアのベンガル・パンジャーブ州をつなぐ、インド人移民のディアスポラ・ナショナリズムという、政治文化研究を接合することによって、人文科学と社会科学を跨ぐ、学際的な研究が可能になる。

ミクロな具体的事例を詳細に再検討することで、日本史を組み込んだ、巨視的で新たな世界史像を構築することを目指したい。
細川道久氏（カナダ史、イギリス帝国史：鹿児島大学）との共著執筆。
・役割分担：秋田が英領インド、東南アジア、日本を、細川がカナダ連邦を担当。

・主題：「帝国臣民」(imperial subjects)とヘゲモニー国家・イギリス帝国
・ヒトの移動の自由と制限（移民制限）
　世界帝国・ヘゲモニー国家が保証した移動・居住の自由（国際労働力移動の自由）

２．　「駒形丸事件」の位置づけ―関係史の観点から

(1) イギリス帝国史―自治領カナダ連邦
移民制限：連邦国家カナダ―ブリティシュ・コロンビア州⇔シク教徒
　　カナダ連邦首相 Robert Borden⇔BC 知事 Richard McBridge―移民局 Malcolm Reid
・1907 年 11 月 11 日　インド政庁にパスポート制度の導入を打診➡インド側の拒否(1908.1)
・1908 年 1 月 8 日　枢密院令(Order in Council)第 27 号―continuous journey regulation
・1908 年 6 月 3 日 枢密院令第 1225 号―アジア移民に 200 ドルの現金携帯を義務付ける。
　➡インド系の制限を想定―Cf.　1885 年中国移民人頭税、日本移民の自主規制
・1910 年 カナダ新移民法―「カナダ市民」規定（技術的規定）
・カナダのカラー・バー（人種差別の障壁）に対するシク教徒の挑戦➡法廷闘争へ
　➡イギリス帝国の拡張とシク教徒＝インド軍兵士、植民地警察官（尚武の民）
　　「帝国の憲兵」と除隊後の優遇
「駒形丸」 22 名の上陸・入国のみ許可、残りの船客の上陸拒否、門前払い。
・カナダの自治権と帝国：連邦政府の圧力

(2) 日本との関連(national & local history)：日英同盟、第一次大戦の開戦前後＝日独戦争
1. 駒形丸：大連（関東州）に本拠を置く神栄汽船合資会社が運航（3085 トン）
　日本帝国における租借地・関東州―関東都督府の管轄
　「便宜置籍船」―海運業の伸長と自由運航、規制逃れ⇔海運同盟（国際カルテル）
　-門司＝香港間での石炭輸送の貨物船➡苦力輸送のため貨客船に香港で改装
　-日本人船員で運行⇒後に、日本外務省はその安全保証に苦慮（VC 領事への訓令）
2. 帰路神戸での交渉（1914 年 8 月 20 日―9 月 3 日）：インドへの送還交渉
神戸英国領事フォースターと代理商佐藤商会➡石炭代含む諸経費 19000 円,インド政庁負担
　神戸在住のインド人住民⇔アジア間貿易の担い手、親日的姿勢

(3) 英領インドとの関連：インドのナショナリズム、インド軍と第一次大戦
1. Gurdit Singh: シンガポール（海峡植民地）で活躍したシク教徒の実業家
　➡経済事業として、インド人のカナダ（北米）移民を企画する
　　香港植民地当局の懸念―出航許可の引き伸ばし（遅延）
2. バッジ・バッジ騒乱(1914 年 9 月 29 日)➡インド政庁の「過剰反応」
　第一次大戦勃発直後の「反乱謀議」⇔1914.8.20 外国人規則(Foreigners Ordnance)
　　1914.9.5 インド入国規則令
　北米のガダル党の反英武装闘争と「駒形丸事件」
　　乗船者の逮捕・死傷⇔イギリス帝国規模での情報収集（諜報活動）
　　インド政庁による迅速な公式調査と自己弁護➡第一次大戦下の総動員体制
3. 1915 年 2 月 15 日・シンガポール・インド歩兵連隊（800 名）の「反乱」
・大戦初期の軍事動員体制への不満、オスマン帝国参戦と戦争の意味
・日本海軍（2 隻の駆逐艦、陸戦隊）の鎮圧への協力⇔日英同盟、
・第一次大戦へのシク教徒「協力」確保の必要性＝「帝国の軍事力」としてのインド軍
4. 戦後の不況・スペイン風邪、ローラット法の制定とナショナリストの反発
・1919 年 4 月 13 日、アムリトサル虐殺事件⇒ナショナリズムの勃興
・Gurdit Singh の再登場（1914-1921 年の 7 年の逃亡・潜伏、自首と 5 年間の服役）
　　パンジャーブ州の独自性、シク教徒の抵抗⇔国民会議派（ガンディー主義）

３．　おわりに

・第一次大戦期の世界―アジアのナショナリズムの勃興と帝国主義・国民帝国の共存体制
・「インド太平洋世界」の原型➡21 世紀世界の課題「自由で開かれたインド太平洋」(FOIP)
・比較帝国植民地史研究への射程

（主要参考文献）

Ananda Bhattacharyya (ed.), *Remembering Komagata Maru---Official Reports and Contemporary Accounts* (New Delhi: Manohar, 2017).
Government of India, *Report of the Komagata Maru Committee of Inquiry* (Calcutta: Government Printing Press, 1916).
Gurdit Singh, *Voyage of Komagata Maru or India's Slavery abroad* (Calcutta, 1928).
Hugh M. Johnston, *The Voyage of the Komagata Maru---The Sikh Challenge to Canada's Colour Bar* (revised edition, Vancouver: UBC Press, 2014).
Sho Kuwajima, *Mutiny in Singapore---War, Anti-war and the War for India's Independence* (New Delhi: Rainbow Publishers, 2006).
T.R. Sareen, *Indian Revolutionary Movement Abroad (1905-1921)* (New Delhi: Sterling Publishers, 1979).
T.R. Sareen, *Indian Revolutionaries, Japan and British Imperialism* (New Delhi: Anmol Publications, 1993).
Darshan S. Tatla (ed.), *Report of the Komagata Maru Committee of Inquiry and Some Further Documents* (Candigarh: Unistar Books, 2007).

柏木清吾「帝国を揺さぶる船『駒形丸事件』にみる移民管理の歴史社会学的考察」神戸大学総合人間科学研究科・博士論文（2013 年）Kobe University Repository: Thesis (2014)。
坂野潤次『帝国と立憲―日中戦争はなぜ防げなかったのか』（筑摩書房、2017 年）。
細川道久「駒形丸事件史料―『大陸日報』の報道記事(I)-(IV)」『鹿児島大学法文学部紀要・人文学科論集』第 75-78 号(2012-2013 年)。
松本壮樹「20 世紀初頭カナダにおけるインド系移民―駒形丸事件を中心に」大阪大学文学研究科・修士論文（2006 年）。
吉田禎男『駒形丸事件』（大阪教科書印刷、1936 年、1960 年再版）。
（一等航海士・塩崎与吉へのインタビュー、ルポルタージュ風の読み物）
秋田茂・細川道久『駒形丸事件―インド太平洋世界とイギリス帝国』（ちくま新書、2021 年）

http://komagatamarujourney.ca/ *Komagata Maru: Continuing the Journey* website by Simon Fraser University Library. A resource-rich website about the *Komagata Maru* story

（一次史料）

Government of India, Simla Records 4 (Confidential) 1914, Home Department. Political-A. National Archives of India.
外交史料館　第3門　通商　第9類　外国人移動: 3.9.1.13「加奈陀ニ於テ東印度人入国禁止一件（駒形丸事件）」（全 2 冊）

『神戸新聞』『神戸又新日報』『大阪毎日新聞』『朝日新聞』『門司新報』 1914 年（大正 3 年）関連記事

【コメントシートでの課題】

「駒形丸事件」を理解するキイ概念は、「帝国臣民」(imperial subjects)である。
「帝国臣民」を世界史の文脈に位置付けた場合、どのような独自性や特徴を指摘できるであろうか。